



Title	文化と経済
Author(s)	田中, 慎一
Citation	経済學研究, 48(3), 42-48
Issue Date	1999-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32122
Type	bulletin (article)
File Information	48(3)_P42-48.pdf



[Instructions for use](#)

文化と経済

田中 愼一

〔1〕 文化

文化というものの本質の意味を問い、考えていく。この、耳慣れし手垢にまみれているとすら言ってよいであろう「文化」とはそもそも何か。平凡な問いであって、まことにはじめにことばありきである。「文化」の本質の意味などあるのか、あるとすればそれはどのように定義できるのか、という問い自体が一つの問題であるのだろう。ところが、言葉の問題なら辞典を引けば済むとの意見がでるにちがいない。確かにそれで解決することがほとんどであろう。だが今それで事足りるとしない。「文化」を引くと辞典が異なるにしたがって、その語義の数は三つ、あるいは四つ、あるいは二つであったりする¹⁾、また同じ意味の語義のはずでありながら、その説明には微妙な違いがあったりする

1) 余計なことかもしれないが念のために、わりと広く知られている国語辞典として例えば『広辞苑 第四版』(A)、『改訂 新潮国語辞典』(B)、『日本国語大辞典』(C)、『岩波国語辞典 第三版』(D)で「文化」を引き、そこにでてくる複数の語義(Aは三つ、Bは四つ、Cは四つ、Dは二つの語義をあげている)を総合すると次の五つの意味になるようである。①文徳(文治)教化。②文明開化。③英語cultureもしくはドイツ語Kulturに由来。④西洋風や新式。⑤学問の進歩。以上の五つのうち、⑤はBだけにあり、①はDにでてこない。Bが⑤をあげているのはユニークであるが、⑤は③の一小分類とみなすこともできよう。Dが①をださないのは、①が古代中国語からの本来の意味であるが現代ではほとんど使われなくなっている事情を反映しているのであろう。元祖が落とされてしまった例である。

る²⁾。つまり辞典によっては欠落させられている語義もあれば、逆に新しく付け加えられている語義があったりすることになる。或る言葉の語義には時代に応じて加除がなされたり、同じ語義の説明にも変化が生ずる、ほんの一例が「文

2) 前註の③の意味を、Aはcultureに由来するものとして説明するが、BはKulturに由来する哲学用語として説明している。③の意味がヨーロッパ言語に由来するものとしつつも、それをAは英語から、Bはドイツ語から説明しようとするわけで、しかもBは哲学的なもののみなしていることになる。このようにAとBでは英・独に分かれているが、元らしきものをさぐると、次の今や古典的なものに行きつくのではあるまいか——「文化 (一)武力、刑罰ナドヲ用キズニ、教化スルコト。(中略)(二)〔独逸語、Kultur、英語、Culture. ノ訳語〕自然ヲ純化シ、理想ヲ実現セムトスル人生ノ過程。即チ、人間ガ自然ヲ征服支配シテ、本来、具有スル究極ノ理想ヲ実現完成セムトスル過程ノ総称。カカル過程ノ産物ハ、学問、芸術、道徳、宗教、法律、経済ナド是レナリ。(三)俗ニ、西洋風ナルコト。又、新シガルコト。「文化住宅」文化村」文化的設備」(大槻文彦『大言海』第4巻、富山房、1935年、230頁) ここには「経済」も文化であるとされており、注目してよいであろう。なお、前註の②の意味はこの『大言海』にでていない。もっとも、引用文中の(三)が②の意味をも含むと解されなくもないが、②はcivilizationの訳語とも解されるが(鎌田正・米山寅太郎『大漢語林』大修館、1992年、628頁)、『大言海』はヨーロッパ言語の訳語としての文化の意味がculture,Kulturとは別にcivilizationにもあることをはっきりとはみとめなかったことになる。文化の語源としてヨーロッパ言語としてはculture,Kulturであって、civilizationには否定的だったのか。おそらく文化と文明の違いが強く意識されたのであろう。とすれば、文化の意味として核心的なものとして残るのは③になるのではあるまいか。それは西洋のなかにある或る言葉の意味の日本への導入という問題を含む。因に「人生すべてチャンスに乗ずるのは、げびた事である。」との庭訓を残した太宰治の翻訳言葉「文化」に対する態度(嫌

化」にもあるわけで、それ自体は死物である言葉にも時代的にみると生きもののごとき側面があることになる。

文化をもっとも平易に一つだけ定義づけるとすれば、抜け出ること、もしくは、抜け出て変わっていくこと、ではあるまいか。無論これは辞典になく、わたくしに、文化という言葉に一つの意味を付け加えようとしているのである³⁾。そしてさらに、これを本義とし、辞典に列記されている複数の語義はこれからの転義とみなしてよいくらいとさえ思っている。無謀であるとの批難は十分承知のうえで、仮に文化の本質の意味の一つ確定できるとすれば、これが有力なものになるのではないかと考えるからである。すなわち根本に直行して文化を再定義する試みであるが、既存の複数の語義を無視しているわけでは勿論ない。むしろ、それらがバラバラにならぬよう、この再定義によって束ねたいと考えるのである。

さて、では、なにから抜け出るかということ、自然的生存から、である。自然的生存とは、自然の一部、自然に埋没した存在、である。すべての動植物はそうになっていたし、今でもほとんどがそうになっているが、人間だけがこの状態から抜け出した⁴⁾。このように自然から脱出を始

めていき、達しえた自然的生存からの離脱の距離は様々である。この離脱を例えば物理的な方面でみれば、高速ジェット機などはその最先端をいくもので、文字通り舞い上がり、離脱をあたかも無限的にするのである。

抜け出るといふ、この離脱の距離には長短いろいろあるなかで、ついに飛ぶようになった。しかも大量に、猛スピードで移動する。かつて飛ぶのは神的なことであった。王の先祖を鳥と想像した古代神話がわりとある。元祖は卵から生まれたとする伝説である。こうした古代人からすれば、航空技術の高度な発展をとげた現代人は神的な存在になるだろう。文化発展の高度・低度はこの離脱の距離の長短に対応するだろう。その高度が文化価値の高度と即応しないとしても。個体としても種としても脱皮⁵⁾を重ねて比較的短時間のうちに変貌をとげつつ人間は賢くなってきた。そのため、人間はどこまでも賢くなれるとする見方⁶⁾もでてくるのであるが、しかし賢いといっても必ずしもwiseであるとはかぎらず、clever(悪賢い)やsmart(他にまさるための抜け目なさ)であったりするわけで、競争原理が大きく作動するようになった現代社会にあっては、こちらの方が賢い中味とみなされがちであろう。

なお、漢字の「文」の原義は人の死であり⁷⁾

悪と利用)はおもしろい。(筑摩書房版全集8, 1956年, 254—255頁)

- 3) ウェーバー(Weber, Max 1864~1920)による次のごとき論述を参考にした——「文化」なるものはすべて、自然的生活の有機体的循環から人間が抜け出ていくことであって、そして、まさしくそうであるがゆえに、一歩一歩とますます破滅的な意味喪失へと導かれていく。(ウェーバー「世界宗教の経済倫理 中間考察」1920年、大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房、1972年、所収、158頁)
- 4) 前註のウェーバーによる論述のほか、ヘーゲル(Hegel, Georg Wilhelm Friedrich 1770~1831)による次のごとき論述が参考になる——「獣の体からニョッキリ出ている人間の頭は、自然的なものからの脱出を始め、自然的なものを引きちぎって、すでにいくらか自由になって辺りを眺め廻している精神を表わしているが、しかしその精神はまだ全くはその縄目〔束縛〕を抜けきることにはなっていない。」(ヘ

ーゲル「歴史哲学講義」1822—1831年、武市健人訳『歴史哲学』上巻、岩波書店版全集10, 1954年, 277頁)

- 5) インドの『スッタニパータ』(Sutta-nipāta)[パーリ語で書かれ、西紀前268—232(アショーカ王)以前に成立、「経の集成」の意]の冒頭部分には「旧い皮を脱皮して捨てるようなものである。」というフレーズが17回くりかえされている。(中村元訳『ブツダのことは』岩波文庫、1958年)
- 6) 「人は動物だが賢い動物である。考へてどこ迄も其社会を改造して行ける動物である。神を懐ひ死後を信じ得る動物である。さうして其以外の何物でも無い。」(柳田国男「民間伝承論」1934年、『定本柳田国男集』第25巻、筑摩書房、所収、348頁)
- 7) 「文は祭事に文祖・文考・文母のように先人に冠するという語で、文とは死者のいわば聖記号である。」(白川静『字統』平凡社、1984年、759頁)

(したがって世代交替を意味することにもなるう)、「化」の原義は変わることであるから⁸⁾、「文化」なるものを、あたかも抜け出て変わっていくことである、これを文化の本質的意味としてよいのではないかとする私見は漢字の原義の合成と親和的なものである。

〔2〕 経済

さて、この脱ぎすてられた皮ともいえる文化産物⁹⁾は様々な領域にわたる。この文化領域は人間の生(life)の営みの諸領域となって展開し、それぞれ社会現象をとる。文化諸領域には経済、政治、戦争、言語、法、行政、教育、道徳、技術、思想、学問、芸術、宗教など様々ある¹⁰⁾。このうち疑問もでそうな戦争も文化であって、戦争は人間が生きるか死ぬかであり、時には国家のみならず民族そのものが滅びることすらあるから、その時代の最高の技術が駆使されるし、また戦争を契機に技術の飛躍的發展がなすとげられやすい¹¹⁾。比較的短期間のうちに、ほとんどあらゆる

文化領域が動員されるか巻き込まれるという意味で総合的な文化領域という性格を帯びやすいからこそ、その影響力も甚大となる。

ところで、文化諸領域はそれぞれに応じた物質的諸財を必要とする。思想¹²⁾(或る事柄が過去どうであったか、現在どうであるか、未来どうなるかを体系的に説明しようとするもの)の至高形態である宗教¹³⁾(人間は前世どうであったか、現世どうであるか、来世どうなるかを宇宙論的に説明しようとするもの)においてすら、その現実的展開のためには物質的諸財がいる。一見すると宗教と同じように非実用的ながら高度な精神的文化産物たる芸術にあっても物質的諸財なしにはやっていけない。したがって、あらゆる文化諸領域が支えられているところの物質的諸財、これを供給していく(生産・分配・流通・消費の諸過程をとる)という営みが人間にあるわけで、この営みを合理的にやっていく形態¹⁴⁾(それぞれの物的獲得手段に媒介されて生産・分配・流通・消費の各行程と行程間

8) 「化去の義よりして変化・化育などの義が生れる。」(同上書、70頁)

9) 「自由に大地から生ずるのはNaturprodukt(自然産物)であり、人間が耕作播種したときに田畑の産するのはKulturprodukt(文化産物)である。これに従へば、自然はひとりでに発生したもの・「生れたもの」及びおのれ自らの「成長」に任せられたものの総体である。文化は、価値を認められたもろもろの目的に従って行動する人間によつて直接に生産されたもの、或ひは(もしそれが既に存在しているならば)少くともそれに附著せる価値のゆえにわざわざ養護されたものとして、自然に対立する。」(ハインリヒ・リッケルト『文化科学と自然科学』原著初版1898年、改訂増補第7版1926年、佐竹哲雄・豊川昇訳、岩波文庫、1939年、48頁)

10) ウェーバー「宗教社会学論集 序言」(1920年)、前掲邦訳『宗教社会学論選』所収、22頁。

11) ラスキン(Ruskin, John 1819~1900)はその著『野の権威の王冠』で戦争の価値を次のように述べているという——「戦争はあらゆる技術の基礎であると私の言う時、それは同時に人間のあらゆる高き徳と能力の基礎であることを意味しているのである。こ

の発見は私にとりて頗る奇異であり、かつ頗る怖ろしいのであるが、しかしそれがまったく否定し難き事実であることを私は知った。簡単に言えば、すべての偉大な国民は、彼らの言の真理と思想の力とを戦争において学んだこと、戦争において涵養せられ平和によって浪費せられたこと、戦争によって教えられ平和によって欺かれたこと、戦争によって訓練せられ平和によって裏切られたこと、要するに戦争の中に生まれ平和の中に死んだのであることを、私は見いだしたのである。」(新渡戸稲造『武士道』原著初版1899年、増訂第10版1905年、矢内原忠雄訳、岩波文庫、1938年、1974年改版、31頁より再引)。

12) 「現在の困窮の状態はいったいどうして起ってきたのか。また、どうしたらわれわれは、そして人々は、この状態から逃れ出ることができるだろうか。そうした「どこからどこへ」、あるいは「何から何へ」という将来への視点を含んでいるような理念が「思想」でしょう。」(大塚久雄『社会科学の方法』岩波新書、1966年、86—87頁)

13) 「こうしたヴィジョンが未来へさらに伸びて、ついに来世までがその中に入ってくるような壮大な規模に達しますと、それが宗教となる」(同上書、88頁)

14) ウェーバー「世界宗教の経済倫理 中間考察」、前掲邦訳書、155頁。

物質移転が長期継続的に循環していく形態)が経済であるとみなすことができる。

それゆえ経済と他の文化領域との関係は、前者は後者にたいして土台としての意義¹⁵⁾をもつ。その関係はこれに尽きるのであって、それ以上でもそれ以下でもない。だから経済が文化諸領域のなかで最高位を占めるわけではない。どの文化領域が最も重要であるかはわからないというしかない。それが決められるとしても、このことは個々の人間が有する文化価値にゆだねられているというべきであろう¹⁶⁾。

ただ、経済の特徴は土台として機能するがゆえに日常性を色濃く帯びる、あるいは日常性そのものという点である。日常性なるものが極めて重要であることは言うまでもあるまい。例えば、日常性の端的な具現である衣食住は主に家族をめぐって展開する。家族、それは特別に緊密だ(一緒に食事をし、一つ屋根の下にねむる)。継続的な人間関係であり、家の内外両面における運命の共同をもって営まれ、家の外に対しては連帯性(家共産制の消費共同体であるから経済的にも、肉親の情であるから人格的にも)、内においては日用品の共産主義的な使用があるから、成人しても家の習慣や教育があとあとまで残って影響し、「心にしっかり刻みこまれた幼時の想い出」となる¹⁷⁾。

こうした家族をつなぐ二大原理が性と食で、

性の共有関係は夫婦をつなぐだけだが、食の共有関係は家族全員の連帯を維持するものとして機能する¹⁸⁾。このことは血縁関係にない他人同士の連帯をつくるばあいでも妥当する。例えば、王は、最も信頼できる従者を食卓仲間とし(食卓仲間の従者制¹⁹⁾)、これが貴族の萌芽になるやもしれず、また官僚制を形成していくこともあったらしい²⁰⁾。

家族とは恒常的な食卓仲間と把握できるほどである。そして、この家族に象徴されるような日常性こそはあらゆる思想がためされる場である²¹⁾。

〔3〕 農業

そうした経済の基礎になりうるもの、それは農業である。なぜ、そうなるか。物質的諸財のうち最も重要なのは食糧であるが、これの安定的な供給は容易ではない。そもそも、あらゆる動物は食物確保という重荷(great burden)を背負っている²²⁾。安眠をのぞけば動物の主たる活動は食物獲得行動と性行動である。食と性が根源的である(食は個体の再生産に、性は種の再生産に不可欠な絶対条件である)ことは、人間存在

15) ウェーバー「宗教社会学論集 序言」, 前掲邦訳書, 23頁。

16) 「殆んどすべての科学が、言語学から生物学にいたるまで、単に専門的知識たるのみでなく、『世界観』の製造者たることをも時として要求してきたのである。そして近代の経済的変革の巨大な文化意義と特に『労働者問題』のすばらしい重大さに圧せられて、自己批判を忘却した一切の認識のもつ根絶し難い一元論的傾向がこの途に滑り込んだのは当然である。」(ウェーバー「社会科学的並びに社会政策的認識の『客観性』」1904年、富永祐治・立野保男訳『社会科学方法論』岩波文庫、1936年、40頁)

17) ウェーバー『経済と社会』(初版1921年、第4版1956年)第2部第9章1節—7節(世良晃志郎訳『支配の社会学』全2冊、創文社、1960年、1962年)I, 144—148頁。

18) 石毛直道『食事の文明論』(中公新書、1982年)57頁。

19) ウェーバー『古代農業事情』(1909年)、渡辺金一・弓削達訳『古代社会経済史』東洋経済新報社、1959年、59頁、120頁。

20) 前掲邦訳『支配の社会学』II, 426—427頁。

21) 「活字の世界に生きるだけの純粹思想なら、いくらでも急進的になれるし、いくらでも破壊的になれる。けれども、それが本当に社会を変革する力を持つためには、それが家庭という場所へ入り込み、そこに腰を据えなければならない。すなわち、身も心も自由な学生でなく、堅気の職場に縛りつけられ妻子や両親を抱えた現実の人間の心を攪むという実績を持たねばならない。」(清水幾太郎『本はどう読むか』講談社現代新書、1972年、66—67頁)

22) Lewis Morgan, *Ancient Society or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization* (Chicago, 1877), P. 20.

にとっても然り。いずれも根源的であるが、食と性は親しい隣人同士ながら、プライオリティは食の方にある。それは日々生命を支える日常財そのものである。こうした食糧の意義は、例えば古代中国語の「人天」やドイツ語のLebensmittelといった表現に端的に示されている。

動物の食物確保形態にはFoodgatheringとFoodhuntingがあり、草食動物は主に前者、肉食動物は主に後者の形態を、雑食動物は両形態をとるのであり、人間は雑食動物として太古以来FoodgatheringとFoodhunting²³⁾にいそしんできたが、いずれも食物確保の動揺性大なるをまぬがれない。まことに生死紙一重にあたるほどの負担であって、この重荷をおろすために持てる時間と体力が惜しまれること無いほどである。

農業はFoodproducingであり、この食糧生産を始めることで、人間は全動物に宿命づけられた食物確保の不安定条件という重圧から解放される巨歩を踏み出した。Foodgathering, FoodhuntingからFoodproducingへの転換であるこの、新石器革命(Neolithic Revolution)²⁴⁾と称される本源的農業革命は人間の個体数が飛躍的に上昇し始める画期となった。人類史に新紀元をひらく農業社会がこうして展開していき、農業が歴史の起動力となった。

使用価値視点からする物質的諸財の序列において、食糧は至上的地位を占めるものである。その食糧を生産する農業が経済の基礎となる。したがって究極的には農業こそが文化の基底である。こうした関係を語源もよく示している。Economyの語源であるOikonomiaはギリシャ語で農業を表わしていたし、文化という訳語がつけられたCultureの語源である Coloはラテン語

で耕すという農耕を表わしていた。

たとえれば、農業が根であり、経済が幹であり、その他の文化諸領域は枝葉や花であって、農業は見えない根のような位置になっている。花のごとき学問や芸術は華やかで目立ちやすいから、文化といえはこれのみと誤解されやすい。

本源的農業革命はそのご金属器革命²⁵⁾をもたらすことになり(金属器の製作には専門工人を必要とするが、専門工人の養成には安定的な食糧供給を可能にした農業の成立が先行せざるをえない²⁶⁾)、また都市文明成立の前提条件となったが、集中的な都市文明の対極的位置にある散在的な農業は見えにくく、時としてその基底の意義は等閑視されるか、忘却されすらする。

さて、農業が経済の基礎であるのは使用価値視点からする物質的諸財の序列に占める食糧の地位からのみ根拠づけられるのではない。こうした使用価値体系からだけでなく、物質循環体系からいっても、農業は経済の基礎なのである。農業の世界というものは——なぜ、それが経済の基礎であり、基礎であるということは最高に合理化された形態であるということだが、それが意味するところは——その生産が有機的生命体(栽培植物である作物と飼育動物である家畜)を対象とするがゆえに有機的拘束をうけるが、またそれゆえにいえば半永久的な有機的循環をとることができるからである。

これと対蹠的なのが鉱物資源にもとづく鉱工業である。こちらのばあい対象は無機物であるから無機的無拘束であって、比較的短期間のうちに急激に産出量を伸ばすことが出来る²⁷⁾。その経済過程で必要なエネルギーを化石燃料として、まず石炭(薪や木炭を第1の火とすれば、

23) 道具をもってするFoodhuntingが「裸のヒトニザル」の決定的契機となつたらしい。(Desmond Morris, *The Naked Ape*, London, 1967. 日高敏隆訳『裸のサル』角川文庫, 1979年)

24) Gordon Childe, *Man Makes Himself*, London, 1936. (ねず・まさし訳『文明の起源』岩波新書全2冊, 1957年改訂版)上, 111頁。

25) 同上訳書, 上, 132頁, 下, 19—30頁。

26) 佐原真「農業の開始と階級社会の形成」(『岩波講座日本歴史』1, 1975年, 所収) 115頁。

27) ウェーバー『経済史』(1923年), 黒正巖・青山秀夫訳『一般社会経済史要論』全2冊, 岩波書店, 1954年, 1960年, 下巻, 157—159頁。

これは第2の火)、ついで石油(第3の火)を蕩尽しつつあるが、掘りつくしてしまえば終末がおとずれざるをえない。化石燃料の再生産は出来ないのであり、「地下埋蔵物の掠奪的採鉱はその時間的限界をもたざるをえない²⁸⁾。」からである。そのため、ついに第4の火(原子力)に手を染めるに至った²⁹⁾。

さて、人間が自然的生存から抜け出したのは人間単独ではない。同伴者がいた。栽培植物と飼育動物である。種としては生物界のごく一部にすぎぬこれらの生物と一緒に、人間は抜け出ていった。これらの特殊な有機的生命体は人間の目的にそって増殖することになる。手段としての作物・家畜である。のち生物資源という見方がでてきた。その増殖には一個体の増量と総個体数の増加との両面があり、それを促進するのが品種改良であって、自然淘汰に代わるに人工淘汰をもってするのであった。生物資源視されることにもなる(それは人間をも資源視することと同一傾向にある)一部の有機的生命体の生殖行為が人間の管理下におかれた。その有機的生命体のうち人間にとって有用な部分(器官)が発達し、肥大化することもあり、全体的バランス維持の野生スタイルにあらざる全体的バランス喪失の育成スタイルに傾斜していく。野生種にあらざる栽培種、野生動物にあらざる家畜が人間の文化産物として展開していく。農耕文化と家畜文化である。(因に古代ローマの pecunia [貨幣] は pecus [家畜] に由来する。家畜貨幣である。³⁰⁾)

自然淘汰は造物主がつかさどっているように観念されるが、人工淘汰は人間がつかさどる。とりわけ家畜、ことに哺乳類の生殖行為は人間のそれと類似的であるから、哺乳家畜の人工淘汰は一種の造物主的役割を担う人間をして人間類似の造物主(一神)を想起させ、一神教の成立をもたらすこともある。遊牧の民において一

神教が誕生する(例えば、古代ユダヤ教³¹⁾、それを源流とするキリスト教、そしてイスラム教)。そこにおいては造物主を一神とするから、本来的に多神教的にならざるをえない偶像崇拜は否定される。遊牧の民に宿命的だった移動性——それは農耕の民との間に紛争をひきおこしやすく多神教的な農耕の民に対抗上必要となる優越感の精神的支柱如何という問題を含む——は、苛烈ならざるをえぬ一神教を志向することになる。また、日常茶飯事と化する家畜の殺生——それも生後より慈しみきたった動物、しかも乳獣として獣乳経済Milchwirtschaft³²⁾の道をひらかせ乳嗜好Milchgenuss³³⁾を享受せしめてくれた哺乳家畜の流血的な生命奪取——は、人間をして共生動物の魂の慰藉と自らの心の救済を希求させることも至高的な一神を生みだす推進力となっただろう。そして、哺乳家畜の人工淘汰は優良と目された雄による一雄多雌的關係で、雄優位原理が働くから、そこに成立する一神教は男神的なものとなる。

他方、多様な風土を受容しつつその中に地著する農耕の民は、その主たる生産物が季節性を帯びる各種の栽培植物であることから、太陽エネルギーとの関係が直接的となるため、太陽(天)を頂点とする多元的な自然崇拜が根底にある多神教をとりやすく、しかも作物の豊穰願望から女神崇拜も是とする傾向をとる。たしかに「農民たちは、その経済生活全体がそうであるように、とくに自然に繫縛され、自然の威力

30) ルクセンブルク「経済学講義」(1907—1912年)、岡崎次郎・時永淑訳『経済学入門』岩波文庫、1978年、328頁。

31) 「本書がもつばら論究の対象としようとしている小家畜飼育者は、砂漠の駱駝を飼う牧者と同様に天幕生活をし、季節的に牧場を交替するときには、……遠方の牧場をめざして、あるいは東から西へ、あるいは北から南へとはるばるかれらの家畜を追いやるのである。」(ウェーバー『古代ユダヤ教』1917—1919年、内田芳明訳、みすず書房、合本1985年、20頁)

32) 前掲邦訳『一般社会経済史要論』上巻、96頁。

33) 熊代幸雄『比較農法論』(御茶の水書房、再版1974年)4頁。

28) 同上訳書、下巻、160頁。

29) 小林昇『帰還兵の散歩』(未来社、1984年)253頁。

に従属しているために、呪術——すなわち自然の力のうえで、または、なかで、力を振っている精霊たちを呪術によって押えつけること、あるいは端的に代償を払って神々の好意を買いとること——に親しみやすい。³⁴⁾」のである。

〔4〕 自然

自然とは何か。それは一切の生命の根源であるから、いわば生きた衣服を着ており、どういう衣服なのかを観察し読みとれるはずの、いわば大きな書物³⁵⁾である。だから、よく読もうとしなければならぬ。われわれが目に向かうところを高くし、より高いものを目指そうとするなら、自然という大きな書物にのぞまねばならず、そこで哲学することも可能だということである。神を事とする宗教とモノ・コトを事とする科学との間にある人間を事とする哲学なければ多量の知識あるも真理に到るまい。

生物界の淘汰主体は自然だが、人間は人為淘汰という自然淘汰と類似のことをやっているから、自然と対等な地位にあるかのように人間は錯覚することもある。自然征服という表現もできてきたわけである。それは鉱物資源の大規模な近代的開発の一表現でもあるのだろう。

しかし人間はあくまで自然の一部にすぎない。その一部の位置をしいて詮索しようとするなら、せいぜい自然の真ん中あたりにいて（万物の霊長）、自然の法則を認識し正しく応用するというかぎりでは自然を把握せんとする³⁶⁾。

自然の一部であるから人間は他の動物と同様に、自然との間で物質代謝過程³⁷⁾に入る。これ

が自然から食物を摂取し自然へ排泄するという摂取・排泄過程になるのは全動物が共通している。動物はこの摂取・排泄が直接的で、人間は間接的になっているが、人間が人間であるかぎりはこの物質代謝過程の原理である摂取・排泄過程を形態変化をともないつつ繰り返さざるをえない³⁸⁾。農業が人間の産業として普遍的なものにならざるをえないのである。

この農業もそうだが、人間は自然との物質代謝過程を摂取・排泄過程にとどめることなく、生産・分配・流通・消費という経済過程に入り込んだ。その物質代謝過程はだんだん複雑となっていく。とくに農業社会から近代鉱工業社会への転換はその複雑さを深化させた。自然に差し入れる物的獲得手段は高度化して遂に資源問題を引きおこし、物的加工手段は変形加工だけでなく変質加工すらもたらした。その結果、自然への還元が至難な物質も増産される。

現代の大量生産・大量消費体制にもとづく産業廃棄物・生活廃棄物は環境問題を地球の規模に拡大しつつある。人類絶滅（無救済のまま）を確信する無神論者エンゲルスの預言者的啓示にいう「地球上でその最高の精華、思考する精神³⁹⁾」たる人間による物質循環体系の破綻である。こうしたなか、農業が本来的にもつ有機的循環原理を再認識する必要は日々強まっていかなざるをえない。類としてナルキッソスになりつつある人間の自惚れもほどほどにしなければならぬ。まことに「人間が最高の存在とせられることから来る帰結は、人間が却って自分自身に対して尊敬を払わないということである。なぜなら、人間はより高い存在の意識をもつときにはじめて、人間に真の尊敬を払い得る立場に到達するものだからである⁴⁰⁾。」

34) ウェーバー「世界宗教の経済倫理 序論」(1920年)、前掲邦訳『宗教社会学論選』所収、63頁。

35) ガリレイ『天文対話』(原著1632年、青木靖三訳、岩波文庫全2冊、1959年、1961年)上、11頁。

36) エンゲルス「猿が人間化するにあたっての労働の役割」(1876年)、邦訳『マルクス=エンゲルス全集』第20巻、大月書店、1968年、所収、492頁。

37) マルクス『資本論』、岡崎次郎訳全5冊、大月書店、1968年、第1分冊、234頁、656頁。

38) 内田義彦『作品としての社会科学』(岩波書店、1981年)168頁。

39) エンゲルス『自然の弁証法』「序論」(1875—1876年)、前掲邦訳書、所収、358頁。

40) ヘーゲル前掲書、144—145頁。